

昔むかし、ある町に、貧しい若者が住んでいた。若者は、物乞いをして暮らしていた。あるとき、若者は、恵んでもらったお金をかき集めて、ひとふりの剣を買った。けれども、大のおくびよう者で、人間と戦うことなどできない。やたらにはえを打ちころした。ころしたはえが千匹になったとき、若者は、剣に、大きな文字で、「打つこと千、とらえること千、放つこと千、神の加護により」とほりつけた。すると、いっばしの勇者のような気になってしまった。そこで、剣を腰にぶら下げ、羊の皮のマットをかついで、日の出とともに、旅に出た。

飲まず食わずで、砂漠を歩き続けて、ある夕方、若者は、ある町の城門にたどり着いた。城壁のそばに羊の皮をしいて横になり、足元に剣を置いた。ちょうどその前を、ひとりの兵士が馬で通りかかった。兵士は、剣にほりつけられた文字を読むやいなや、馬を走らせて、宮殿のスルタンのもとにかけつけた。

「たいへんな勇者が、城壁のかげで寝ております」

スルタンは、兵士の一隊をつかわして、若者を起こして宮殿に連れて来させた。

「打つこと千と、剣に書いてあるが、ほんとうか。おまえはそれほど強いのか」

「ほんとうです。千を打ちころし、千をとらえて放ちました。けど、今は、腹がへって力が出ない」

「では、力が付くように、食べさせてやろう。そして、おまえを軍の司令官として雇おう。どうだ」

「いいですよ」

何日かして、スルタンは、若者をよんでいった。

「もしおまえが、隣の国と戦ってくれるなら、わしのひとり娘と結婚させてやろう。どうだ」

「いいですよ」

こうして、若者は、スルタンの娘と結婚して、何不足なく、のんきに暮らし始めた。

ところが、ある日突然、となりの国と戦争が始まった。若者は、剣をぶら下げ、羊の皮をひつかぶって、宮殿の裏口から逃げだした。妻が気づいて追いかけた。すぐに追いついた。妻は泣いてたのんだ。

「逃げないで。どうしたら勝てるか、教えてあげますから。スルタンの馬を借りなさい」

「いやだ。羊の頭のスープを作ってくれなきや、いやだ。そんな馬には乗らん」

「何でも作ってあげるわよ」

そんなわけで、若者は、スルタンの馬に乗る羽目になってしまった。体をくらしにしばらくつけ、片手には剣を持ち、もう片方には羊の頭のスープを持った。馬は、まっしぐらに敵に向かってかけた。若者は、羊の頭をむしゃむしゃ食べていたが、はずみで、それを落つことしてしまった。そこで、両わきを走る兵士たちに、大声でさげんだ。

「頭を取れ。頭を取れ」

兵士たちは、敵の大將の頭を取れといわれたものと思いこみ、勇敢につつこんで行って、大將の首を打ち取った。敵は、列を乱して逃げだした。若者のほうは、生まれて初めて血の海を見てこわくなり、いちもくさんに宮殿に引き返した。そのあとに、勝ちほこった味方の兵士たちが続いた。

この輝かしい勝ち戦に、スルタンは、気をよくして、盛大なお祝いの会をもよおした。若者は、勇者としてまつり上げられ、町は喜びにわいた。

しばらくして、スルタンの弟が、謀反を起こした。スルタンは、若者に戦いを命じた。若者は、剣をぶら下げ、羊の皮をひつかぶって、宮殿の裏口から逃げだした。妻が気づいて追いかけた。すぐに追いついた。妻は泣いてたのんだ。

「逃げないで。スルタンの馬を借りなさい」

若者は、体をくらしぱりつけ、馬は、まっしぐらに敵に向かってかけだした。しかし、大木にぶつかってしまった。大木は、根元からぬけ、若者は、それをしつかとだきとめた。そのまま大木をかかえてかけぬけると、敵の兵士たちは、みな、なぎ倒された。こんども、勇者は、勝利を飾った。町は喜びにわいた。

しばらくして、人食いライオンが森から出て来て、村や町をおそった。やがて、ライオンは、宮殿にまでせまった。スルタンは、若者に泣きついた。

「あぶないライオンが来る。すまん、助けてくれ」

真夜中、若者は、剣をぶら下げ、羊の皮をひつかぶって、宮殿の裏口から逃げだした。こんどは妻も気づかなかった。

町を出ていくも行かないうちに、ライオンが待ちかまえているのが見えた。若者は、あわてて、そばにあった木によじ登った。ライオンは、木の下まで来た。若者は、恐ろしさに、枝から枝へと、ぐるぐる飛び移った。ライオンも、それに合わせて、木のまわりをぐるぐる回った。何時間も回っているうちに、ライオンは目を回して、ぶったおれてしまった。ちょうどそのとき、若者が乗っていた枝がぽっきり折れた。若者は、ライオンの背中に墜落した。はずみで、若者の両手のつめが、ライオンの首すじに食いこんでぬけなくなってしまった。ぎょうてんしたライオンは、若者を背負ったまま宮殿に向かって走りだした。そして、宮殿の番兵たちにとらえられてしまった。若者は、ライオンの背中からひらりと飛び下り、剣でライオンの首をすっぱり打ち落とした。こんども、勇者は、勝利を飾った。町は喜びにわいた。

しばらくして、七人組のどろぼうが、町をあらし始めた。どろぼうたちは、次つぎに金持ちをおそい、ついに宮殿の財宝にまで手をのびし始めた。若者は、どうせまたどろぼう退治を頼まれるだろうと覚悟した。そこで、剣をぶら下げ、羊の皮をひつかぶって、宮殿の裏口から逃げだした。こんども妻は気づかなかった。

一日歩いて日が暮れて、真っ暗になると、若者は、こわくてたまらなくなった。そこで、たまたま見つけたあばら家にもぐりこんだ。そして、恐ろしさと寒さにふるえながら、天窓を見つめ、ひたすら大熊座の七つ星が出るのを待った。七つ星が出ると、夜が明ける。ところが、このあばら家こそ、どろぼうたちのかくれ家だったのだ。

若者が、天窓を見つめていると、ようやくひとつ目の星が現れた。

「出たな。神よ助けたまえ」と、若者はさげんだ。ちようどそのとき、ひとりのどろぼうが、裏口から出たところだった。どろぼうは、スルタンの勇者に見つかったと思いこみ、おとなしく降参した。若者は、そいつをなわでしばりあげた。

そうこうするうち、ふたつ目の星が現れた。

「また出たな。神よ助けたまえ」

ちようどそのとき、ふたり目のどろぼうが、裏口から出たところだった。そいつも、おとなしく降参した。

こうして、どろぼうたちは、七つ星とともに、次つぎに出て来て、勇者の前にひれふした。若者は、七人をじゅずつなぎにして、宮殿に連れて帰った。

スルタンは、若者を真の勇者であるとほめたたえ、町は喜びにわいた。

やがて、スルタンがなくなると、若者はそのあとをついだ。そして、かしこく、公平に、ぬけめなく国を治めたということだ。

原話：『世界の民話18 イスラエル』小川超訳／ぎょうせい
再話：村上郁